

今村和彦・小川政弘作 「性 — 男と女 —」

- ナレーション うつとおいしい梅雨が過ぎ、もう夏休みも直前に迫ったある初夏の夕暮れ、ここ青春高校に、思いがけぬ大事件が巻き起こりました。3年生A君の婦女暴行事件です。翌日の朝、3年B組の渡谷さんは、興奮しながら白鳥さんのところに駆け込んできました。
- 渡谷利香 ねえねえ直美、今朝の新聞読んだ？
- 白鳥直美 ううん。でもどうして？
- 利香 これ見てよ。
- 直美 なあに？（新聞を読む）「問いただされる高校生の性モラル… S高校少年A、勤め帰りのOLを襲う」。ふーん。
- 利香 「ふーん」じゃないわよ。この辺でS高校って言ったら、うちの学校だけじゃない。3年って言ったら、あたしたちの学年じゃない。A君って言ったら…。
- 直美 （さえぎるように）やめてよ！ そんなにせん索するのは沢山だわ。まさかうちの学校にそんな人、いるわけじゃない。
- 利香 そんなこと分かるもんですか。大体男なんてのは不潔よ！ この前あたしがミニスカートはいて学校に言ったら、男子ったらみんないやらしい目つきでジロジロ見るのよ。男なんてみんな不潔。大嫌い！
- 直美 何言ってんのよ。あんただって満更でもなかったくせに。
- 利香 そんなことないわよ。イヤーね、直美ったら。
- 直美 ウソウソ。ごまかしてもダメ。
- ナレーション さて、そんな会話のあったあと、3年3組の担任の荒木先生が疲れ切った面持ちで教室に入ってきました。荒木先生は、校内きっての猛者で、生徒たちに一目置かれているのですが、どうしたことか、今朝はいつものような元気がありません。
- 荒木先生 みんな、今朝の新聞見たか？ あまり騒がないように。みんなとは関係ないんだから。
- 利香 （小声で）ほら、あたしの言ったとおりじゃない。一体だれかしら？
- 先生 それから、学級委員と生活委員、それに風紀委員は放課後先生のところに来るように。
- ナレーション 先生が「騒ぐな」と言っても、それは無理な相談でした。一日中、学校はその話題で持ち切り——。
- 高橋 （小声で）おいおい、阿部が来てないぜ。
- 伊藤 まさか、あいつがやったって言うのか？ あんなおとなしい野郎に、そんな大それたこと、できるわけないだろ！
- 高橋 イヤ、普段おとなしいからかえって危ないんだ。
- 大谷内 うん。いつも欲求を抑えているから、それが一挙に爆発したのかもしれないねえな。
- 伊藤 そう言えばあいつ、女にモテなかったもんな。
- 高橋 その点、おれなんかまず大丈夫。
- 大谷内 おれ、ちょっと危ない。
- ナレーション さて、放課後、高橋君、伊藤君、大谷内君、白鳥さん、渡谷さんら委員の5人は、先生のいる職員室に行きました。
- 効果音 （ドアの開く音）

直美 それで、阿部君に会いました？

先生 うん。ずいぶんとしょげていたよ。根は悪い子じゃないんだ。要するに、衝動が抑えられなかったんだな。

伊藤 男は満月の夜、オオカミに変身するのだあ(笑う)

利香 やめてよ！ あたし、ますます男性不信に陥っちゃう。

大谷内 だけど阿部の気持ち、なんか分かるような気がするな。

直美 どういう風に？

大谷内 あいつ、いつも独りぼっちだったろう？ こう言っちゃ悪いけど、あいつ、あんまり取り柄がなかったから、みんなに相手にされないで、欲求不満がたまっていたんだと思うよ。

伊藤 そうだそうだ、君ら女の子がいけないんだよ。あいつに色目使えとは言わないけど、もう少し構ってやったら、こんなことにはならなかった。

利香 何言ってんのよ。人のせいにしないでよ。あんたたちこそ、男の友達としてすべきことをしていなかったのよ。

先生 まあまあ、君たちはすぐこれだ。このくらい発散させると、欲求不満も解消されるわけだ。君たちは見ている健全だな。

音楽 (ブリッジ)

高橋 先生、おれ、前から気になってたんだけど、どうしてこの世には男と女がいるんですかね。もし男だけだったら、今度のような事件も起きなかったんだろうし…。だけど先生、おれは前々から、どうして男が対して取り柄もないような女を好きになっちゃうのか、不思議で仕方がなかったんです。

利香 高橋君、それもしかしてあたしのこと？

高橋 ずうずうしいんだよ、お前は。(笑い)

直美 あの一、わたし思うんだけど、それは男性と女性が互いに相手にないものを持っているからじゃないかしら。女にだって取り柄はあるわ。

利香 そうよね。大体男には子供は産めないもんね。

伊藤 ケッ。女だって、男がいなきゃ子供産めないだろ。

直美 だからわたし、男性と女性が互いに助け合う者としてつくられたと思ってるの。

大谷内 「つくられた」って、だれに？

直美 神様よ。

先生 そう言えば、白鳥はクリスチャンだったな。

直美 はい。聖書の中にも、「創世記」というところに、「神が人を男と女とにつくられた」ってはっきり書かれているんです。それから「女は男の助手としてつくられた」って。

高橋 そうか。なんだか、人間は猿から進化したっていう、学校で習った話とはだいぶ違うみたいだけど、その、「女は男の助手だ」ってのはいいね。おれの考えてることにピッタシだよ。

利香 そんなのないわよ。ねえ、直美。ほんとに聖書にそう書いてあんの？

直美 ううん。聖書で言ってるのはね、「人は独りでいるのはよくない。お互いに愛し合い、助け合い、足りないところを補い合って、完全なものにするために、神様は男と女とにつくられた」って言うことなの。

先生 ふーん。白鳥の言っていることは、先生にもうまく言えないが、つまりその、男と女っていうものの非常に大切な点を突いてるような気がするな。土台、考えてみると、近ごろは、このセ

ックスというものがあまりにも興味本位に取り上げられすぎているんだな。“セックス”という言葉を開いただけで、イヤらしいものを想像してしまう。だからそんな好奇心の対象としてしか異性を考えられない。そうだろう、伊藤？

伊藤 そ、そんな目で見ないでくださいよ。でも言われてみれば、確かにそんな感じだなあ。

直美 そうなんです、先生。父から教わったんですけど、本来、“性”、セックスっていうのは、イヤらしい、何か肉体的な男女のつながりだけを言うんじゃないかって、男性、女性っていう、はっきりと違った性を持った人間が、その違いをよく生かして愛し合って行くっていう、何か、もっと人格的なものだと思うんです。

大谷地 ふーん。クリスチャンで、考えることが違うんだなあ。なんかこう、深みがあるっていうか。おれ、見直しちゃったよ。

直美 ううん。そんなことないわ。わたしも前はとても偏見持ってたの、“性”ってものに。そのきっかけになったのは、わたしが中学 2 年の時だったわ。仲良しだった友達が、ある日、こんなことを打ち明けてくれたの。

音楽 (ブリッジ)

M子 ねえ、直美。わたし、和彦君と先週から一緒に暮らしてるの。

直美 え？「一緒に」って、あなた、まさか…！

M子 (クスリと笑って) その、「まさか」なのよ。直美にはちょっと悪いけど。でも、すてきよ、彼って。毎日楽しくって。夜になるとね…。

直美 (さえぎって) やめて！ 聞きたくないわ。

直美ナレーション ショックでした。和彦君というのは、その友達と二人で淡い思いを寄せていた 2 年先輩の高校生だったのです。友達はまるで勝ち誇ったように、彼とのセックスの話をするのでした。わたしは逃げるように家に帰りましたが、それからしばらくは、その二人の姿が浮かんで消えて、わたしを苦しめました。男と女って、そんなにイヤらしいものなら、一生わたしは結婚なんかすまいて固く決心したんです。

高橋 ふーん。だけど白鳥はクリスチャンだからショックだったろうけど、しょせん、男と女だもん、そんなの結構多いんだぜ。むしろ当たり前だろ？

直美 違うわ！ “性”がそんなに醜くなったのは、罪のせいなの。本当はそんなんじゃないわ。わたしが高校に入って間もなく、教会にひと組のご夫妻が出席されるようになったの。奥さんは下半身がご不自由で車イスの生活だったんだけど、ご主人は奥さんをいたわって、奥さんはいつもご主人に感謝して…。何も言わなくても、お二人が心から愛し合っているってことが、ジーンと伝わってきたの。このお二人を見ているうちに、わたし、少しずつ変えられていったわ。“これが、男性と女性が、本当に愛し合うことなんだ”って。

ねえ、みんなも今度、一緒に教会行ってみない？

<完>